大会報告

二つのテレイン、二つのスキル

トレイルO委員会
こやま たろう

2008年5月17，18日 第4回全日本トレイルO選手権大会 東京都）

タイプの全く異なる二つのテレインを巧みに使用した今年の全日本トレイルO選手権大会(JTOC)だった。日本チャンピオンの座を目指してそれぞれその持てるスキルの全てをぶっつけたチャレンジャーたち。安定したベテラン勢の中にも、世代の動きを感じさせる充実の二日間だった。

様相の全く異なるテレイン

今年の日本トレイルO選手権大会(JTOC)は、東京都下という恵まれた地理的条件下で開催された初の二日間大会となった。

一日目は、満開のポピーに美しく彩られた広大な国営昭和記念公園(立川市)で。二日目は新緑あふれるばかりの青梅の森林地域というバラエティに富んだ戦いの場が提供された。(主管:東京都協会、大会コントローラ:藤島由宇)

34名の挑戦者

総参加者80名のうち、Aクラス23名とE（選手権）クラス34名は、二日間の総合成績で評価される新しい試み。

前回の全日本トレイル0大会選手権上位者、年間開催の数ある指定大会(トレイル0の公認大会)の上位入賞でE権を獲得した者23名が、2008年度日本チャンピオンの座に挑んだ。

Day1は都市公園

DAY-1のテレインに関して事前プログラムによると、「立川基地跡の一部に造成された都市公園であり、平坦な土地に幅の広い整備された遊歩道も多く、中心部には広大な原っぱが広がり、周辺に人造の池や小高い丘・森・湿地・清流が点在している。サイクリングコースや子供用の遊具がある広場もあり、変化に富んだ課題の設定が可能である。広場等は基本的に見通しがよいが、森林部分は枝が低く張っている木が多く、やぶや生け垣などもあり、視界が限られる所も多い」とある。

それにたがわず、17コントロール+2T/Cを含む2.6Kmのコースは公園テレインらしいコース・セッティングであった。コントロールは沢を使ったところが3か所、藪(植込み)、こぶ、岩、道・小道、がそれぞれ2か所ずつ、残りは凹地、土塁、池、小川、植生界、木と木の間が各1か所というバラエティのある構成。T/C-1は花壇状の植込みの中の小道を北向きに判断させる地図と現地の照合技術、T/C-2は、南西向きに小川、藪、岩を判断させ,方位を確認させるものだった。

DAY-1 #17(東の岩、南側)

公園コース設定は難しい

公園テレインでのコントロール・セッティングは「公園」という呼び方からは連想できないような、思うようにはなかなかゆかない困難さがあり簡単ではない。道が多くDPとの距離を如何に適正に保つかという苦心がある。また視界が妨げられる要素が多く、透視可能度も季節によって刻々に変化する。申し訳ないことだが、当日の来園者の多寡も、コントロール周辺での競技者の集中力の持続に大きく影響するものだ。

逆にセッティングに凝りだすと、知らず知らずのうちに本質から離れた「深み」にのめりこんでいってしまう危険性とも隣接している。

動けば課題が見えなくなる

DAY-1のコントロールは、総じてDPからの「動きによる確認」を要求するものであったが、動けば動いたで、これと決めたフラッグの視認持続が困難‥というような、なかなかテクニカルな面が多かった。また、小さな沢やこぶなどの数少ない地形の変化もうまく取り入れており、楽しく、かつ気の抜けないコースとなった。(Day 1のコース設定者は杉本光正)

DAY-1 #16（植生界）

やはりキビしい遠距離

最近のトレイルO大会において散見されることだが、今回のコースにおいてもDPからフラッグ群まで約90mの「沢(#3)」という遠距離コントロールが出現した。

これだけ離れると、多少視力の弱いものには「酷」以外の何ものでもない。当日の日照条件にも大きく左右される。

今回はDPを離れて動き回ってもコントロールとの距離は縮まらないし、別角度からの確認も出来ない。「沢」周辺の細部がどのようになっているかの判断が容易ではなく、また、円の中心がデフの表現する位置と合致しているのかどうかも確認できない。

公式掲示板には「競技規則逸脱事項」として遠距離コントロールのあることの事前周知はなされていたものの、結果は正解者が34名中ただ1名‥ときわめて残念な数字になって表れてしまった。

1日目の#3コントロール周辺
DPは北東の陸橋

WTOC(世界選手権)においても、時に遠距離コントロールが出現することがあるが、総じて単純な特徴物(部)を用いることが多く、判断が容易な場合が多い。地図上の 0.5mm 前後の「差＝ずれ」をこれだけの遠目で判断させ、いたずらに競技者を悩ませるようなことはない。

ガイド・ラインにあるように、遠距離コントロールは避けるべきであるが、その是非について検討し、仮に「是」とするならば、どのようなコントロールであるべきかを考えなければならない時期にきているのかもしれない。

7名が同点 TOP 秒差の争い

さて、1日目の結果であるが、前述の遠距離コントロールが影響して、満点者はゼロ。しかし 34 人中 7 人(20%)が次点の 17 点を獲得。満を持して挑んだ吉村がトップ。1秒差で小泉が追い、続いて2秒差で大久保と山口尚宏が入り、日下、中尾、田代がそれに続き、以下1点差で 13 人が追う大接戦となった。2日目の波乱が十二分に予想(期待？)される。

Day 2 は 多摩丘陵

二日目はガラリと雰囲気の異なる多摩丘陵の山中。フットOer にはおなじみの「笹仁田峠」に近い尾根上の一本道の往復コースに、14 コントロール＋2T/C という構成でコースが組まれていた。

耕作地や人家は全く無く、コースの両サイドは新緑一色の森林地帯で、人工特徴物もほとんどゼロ。Day 1 とは全く様相の異なるテレインである。ここにあるのは等高線だけだ。

コンセプトはコンター読み

スタートと同時に受け取った地図を見ると全てのコントロールは等高線がらみのようだ。課題の特徴物(部)は尾根、沢、こぶ、テラス、あん部、植生界、小道などがずらりと位置説明に並ぶ。今日のコース・セッターは「等高線の」児玉拓、悩ませられる予感がする。

DAY-2 ＃14(テラス、西の部分)

T/C の出来が影響大

大方の予想通り、スタート直後に T/C が続いた。2 か所とも非常に急峻な沢を見下ろす課題。やや薄暗い場所で、こまかい地形読みに時間がかかる。

T/C-1 では、正解トップの大久保が唯一の一桁解答の 8 秒で逃げ切ったが、平均解答所要時間は 21 秒と長く、また、T/C-2 では平均 24 秒とさらに長く、一桁の時間内での正解解答者が出なかったことからその難易度を察することが出来るだろう。

Day2 の TC2

ちなみに T/C-1 の正解率は 38%と、コース中全コントロールの最低を示している。コース最初の T/C の出来不出来が、以後の競技に心理的影響を与えることは大きい。

地図読みの楽しさ、難しさ

DAY-2 ＃11(尾根、北の部分)

斜面上にあるフラッグ位置をひたすらに読み取る難しさ、等高線をたどる緊張感をたっぷり味わったコースだった。しかし、＃8や＃13 のような一列に並んだフラッグの判断は難しい。

地形確認や地図読みから解答を導き出すのではなくて、コントロール近くのA点とB点を結ぶ線上に課題フラッグがあることに気付けばよい‥と、競技後に説明されることがよくある。また、競技者も正統的な解法をいろいろと試みる前に、そのような解き方を探す傾向にあるが、この方法は検証方法であって、トレイルOの望ましい解法ではないと思うが、どんなものだろう。

意外な事実・・ウ～ム参った！

実は、DAY-2 のコースには「正解なし」コントロールが全く無かったのである。これは意表をついたコース設定であったというべきだろう。

なるほど競技規則にはEコースには「正解無し」を設けることは義務付けられていない。しかし慣例として、Eコースには 3 か所程度の「正解なし」があるのが通常であり、それが競技者に緊張感を強いるのであるが、「正解なしコントロールが無い」ことには正直参った。無理やりに「正解なし」を何か所かひねり出した競技者も多かった(34 名中「正解なし」が無いことを見抜いたのは 9 名であった)。コース後半になって、「正解なし」が出てこないことに気付き、無理やり「正解なし」をひねり出した傾向を成績表に見ることができる。この件に関してはセッターのノック・アウト勝ちであった。

DAY-2 ＃12(尾根)

木島英登がPクラス４連覇 山口尚弘が総合クラス日本チャンピオンの座に ！

さて二日間のデッド･ヒートの末、以下のように成績がまとまり日本チャンピオンが決定した。

Paralympic クラス
①木島英登 豊中市） 24p 118 秒

Open クラス
①山口尚宏(OLC ルーパー) 32p 31.5
②日下雅弘(東北大) 32p 108.5
③木村洋介(大阪 OLC) 31p 56.5

山口（尚）は 2004 年の第１回日本トレイル０選手権大会から見ると ６位→7 位→3 位→そして１位という努力の甲斐あって ４ 年目にして頂点に登り詰めた。

日本トレイル０選手権入賞上位３位

注目すべきは東海 OLC から京大へ進んだ伴 毅が 肉薄する成績で ４ 位に入ったことだ。若人に将来に期待するところ大である。また今回は指定大会で上位常連達が意外に振るわなかったことも目立つ。ベテランの奮起を期待したいところである。

またＡクラスの総合成績は、
① 阪本 博 (大阪 OLC)
② 小田紀彦 (杉風会)
③ 早野哲朗 (京葉 OLC)
となり、来年のＥクラス出場権を獲得した。

Ｂクラスでは９名が一位となった。
小柳三郎(港南 OLC)、杉山一郎(松塾)
岡崎弘幸(武蔵高)、小田幸恵(杉風会)、原山太一(武蔵高)、元谷秀明(武蔵高)、柄 晃裕(武蔵高)、岡田太一(武蔵高)、嘉藤桂樹(武蔵高)

Ｎクラス
① 山口静子
① 田中啓吾 (武蔵高)
③ 勝野陽子

世界選手権大会出場者は

さて、７月 12 日からチェコのオロモウツ(Olomouc)で、フットＯの WOC と同時開催の WTOC(世界トレイルＯ選手権大会)には、JTOC 優勝者および年間の大会成績評価(ランク)から、次の４名が出場することに決まった。

Pクラス 木島英登
Open クラス 山口尚宏
大久保裕介
山口拓也

なお日本チームの団長･監督は田中博が、チーム･マネージャーは藤島由宇が勤める。

WYOC に於ける日本選手の活躍は年々目覚しいものがあり、上位を占める北欧諸国の大きな脅威となっていることは真実である。金色のメダルを日本に持ち帰る日も、そう遠い夢ではないだろう。

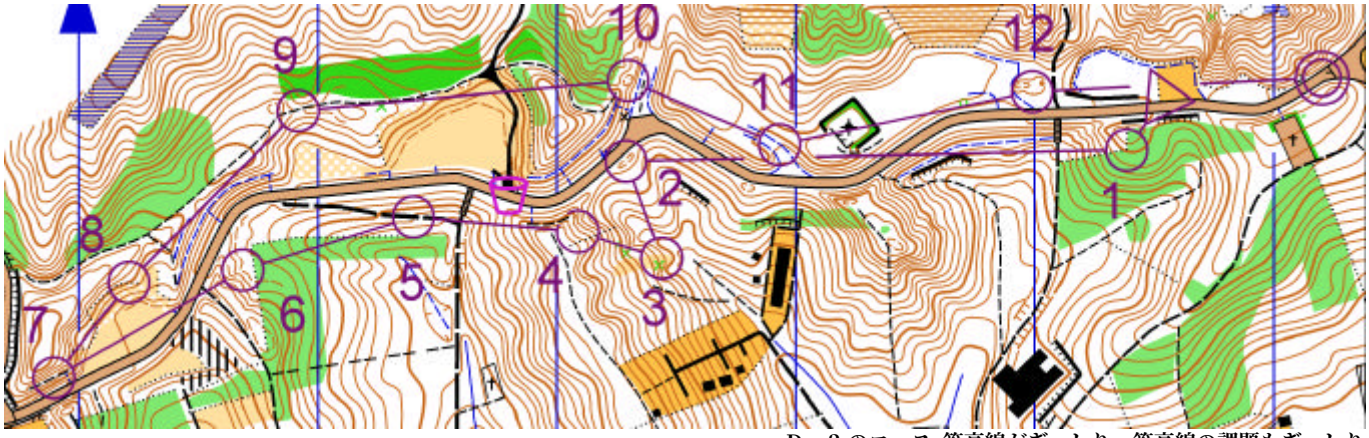
日本チームに読者諸氏の絶大な声援をお願いする次第である。

（こやまたろう）

ＷＴＯＣ２００８出場の日本チームの面々
左から：山口拓也、山口尚宏(後)、木島英登(前)、大久保裕介

今後のトレイル０世界選手権予定

2009 年	ハンガリー	Mislolc 8 月 18-23 日
2010 年	ノルウェー	Trondheim
2011 年	フランス	Savoie



Day2 のコース 等高線がぎっしり、等高線の課題もぎっしり